熊大見舞で感じたこと

四小校区（荒尾）守る会の座談会

荒尾市の四小校区CO患者守る会（会長は小里透さん＝荒尾市倉掛中区八十番地）の十五人の人々は、さる二十日熊大病院入院中のCO患者たちを見舞った。たくさんの会員が参加したが、こんど見舞にいってどんなことを感じたかということについて、十人の人々が小里会長の家に集まって話し合った。参考になる点が多かったので、そのときの内容を紹介する。

宮嶋さんのベットの横でお母さんと語る四小校区守る会の人たち

涙も枯れて…

自由労仂者　いかにCO患者とはいえ、宮島さんのあまりのひどさにビックリしてしまった。泣くにも涙が枯れてしまって、涙もでなかった。

CO患者　CO患者の私がビックリした。かわいそうだというより先に、あんなにもひどい目にあわせておきながら、誠意をもって責任もとろうとしない会社への怒りで、胸がはり裂けそうだった。会社や政府は、CO患者が生きとることがジャマだといわんばかりの取扱いをしている。なさけない。

病院も病院だ

郵便労仂者　CO中毒というものがこんなにも恐しいものだったか、ということを骨身に感じて知った。許せない。本人の苦しみもさることながら、過去五年以上も看病をつづけてこられたご両親のご苦労を思うと、涙があふれ出てとまらなかった。

聞けばあわれほど重症の宮島さんを、三井は二年何カ月も大部屋の病室に入れたまま、放ったらかしていたそうだ。さいわい当時総評議長だった太田さんが労仂省にやかましくいっていったおかげで、いまの個室に移れたのだと聞いたが、それにしても、それまでは宮島さんのお父さんやお母さんを呼びつけては「個室は一日八百円でよかうちゾ」というと、息子ン奴は「なんがよかうちな、おい家は火の車ばな」という。それで私はいうてやるとたんも――「妻子かかえてこそいるが、お前は生きてゆこうとさえ思うならば、カンジンしてでも生きてはいけるが。何ばいうか」と。ほんなこてエ、CO患者を息子にもつ母の気持がようわかった。

先々が心配に

CO患者　宮島さん一家は、先々果してどうなりなさるか。いまのうち何らかの手をうっとく必要があると思うが……。

話合った人々

▼…この日の話合いに参加した人々は、次のとおりである。

会長の小里透さん、副会長の中村一孝さん（自由労仂者）、林田繁行さん（CO患者）、藤野毅さん（郵便労仂者）、塚本利通さん（荒尾市職員）、松本きくよさん（CO患者の母）、坂田ちずえさん（町の主婦）、木永かずえさん（同じく町の主婦）、坂本敏雄さん（荒尾市議）それに炭鉱労仂者の妻の人が一人――十人だった。

一人一人相手に勧誘

会費の百円を惜しんではならぬ

許せぬ人権じゅうりん

自由労仂者　CO患者を守る運動、仂く者の命を守る運動に一も二もなかはず。三池労組として、これからますます重大な闘いになるCO闘争をどうすすめようとしているのか？

炭鉱労仂者の妻　私は何もいえないけど、CO患者に対する補償は、三井と政府が黙ってもつべきです。また全国各地あっちこっちに、こんな守る会をどしどしつくらんなら。

町の主婦A　三井といい政府といい、人権じゅうりんもはなはだしい。貧乏でもすると、親は食べんでも子どもにだけはひもじい思いをさせてはならぬと思い、やっと一人まえに育てあげた立派な息子が、さんざんな目にあわされたうえ、さらに放り出されようとする。

三井の幹部の人々は見舞いにもきてくれないと、宮島さんのご両親が憤慨されていた。私は三井鉱山の社長やそのほかの重役たちをつれてきて、あの宮島さんの枕もとに立たせて、「自分たちの息子がこげんひどか目にあわされたとき、あんたたちはどげん思うか」と、あのむごいお姿をつきつけてやりたか。

欲はいわずに

坂本荒尾市議　これから四小校区CO守る会として、どういう気持をもってこの運動を発展させてゆくかということだが？

郵便労仂者　このCO患者守る会ができるとき、率直にいって月々会費の百円の拠出は痛かばってん役員だからしよんなかけん出さんなんたいくらいな気持だった。ところが、熊大病院で知ったCO患者の実態を思えば、月々の会費百円くらいは問題ではなか。

町の主婦B　月々百円ぐらいのことを思ってはならない。

CO患者の母　CO患者守る会ちいうてつくったもんの、何ばやるとやろかわからんじゃった。CO患者の息子までが「年寄りの出しゃばって何な」とやかましくいう。じゃけんが、このごろでは「そんならもう、きゃアやめようか」と思いよったところじゃったが。

町の主婦A　一般の婦人会でん、いっぺんぐらいは熊大病院のCO患者の皆さんたちば見舞いにいってもよかと思う。

自由労仂者　一般人とは関係のなかごたるばってん、やっぱり自分たち仂く者の仲間のこと、ほかの組合の人たちにも呼びかけて、まず熊大のCO患者の人々を見舞いに誘うことからはじめたい。まして、公害や労仂災害がますます広がっていっているとき、CO患者守る会運動のもつ意義は大きくなっていくばかり。

CO患者の母　私はこれからはもう遠慮せずに、だれにでん呼びかけてゆく。

郵便労仂者　欲はいわん。一人一人が相手。気長にがんばってゆく。これが一番大切だ。（全員うなずいて、これからそのようにしてがんばってゆくことを、固く誓い合って、この日の話し合いを終った）

×

荒尾四小校区には、遠く前橋市大坪町三丁五―四の長沼矩一さんも希望して参加している。

私は許せない

小里会長の手記

四月二十日、私たちは熊大病院のCO患者の皆さんを見舞いにゆきました。

そして患者の皆さんの姿を見て、また一番重病患者の宮島さんのご両親の言葉を聞き、私は御見舞の言葉を忘れ、腹立たしさと悲しさがこみあげてきました。

夫を、わが子を無残な姿にされたご家族の心の中は、言葉ではとてもいい尽せないようでした。とくに六年もCO患者の息子さんと共に苦しんでこられた宮島さんのお母さんは、「いつそこの子を殺して、自分もいっしょに死のうと思ったことがある」といっておられました。

われわれはより一層、守る会を広げることを泣きながら決意しました。

それにしても責任者の三井は、患者はもちろんのこと家族のことなどかえりみず、そ知らぬ顔で一段と合理化を強めているのです。会社は、ひとたび使いものにならなくなった人間は、どしどしやめさせることを考えている。私は、その事を許せない。

皆さんもっと人の命を大切にする社会を作るために、CO患者を守り、命を守り、合理化と公害に反対し、お互いに手を取り合って立ちあがりましょう。

会長の小里さん

私の息子も…

CO患者の母　以前から宮島さんのお母さんはよく知っとったから、よけい悲しゅうて言葉ン出らんじゃったたんも。「ほんにおおごとじゃったの」と、そしていうだけがせいいっぱいじゃった。宮島さんのお母さんな「息子のヒラをかえすように「早よう、個室に移ってください。早よう早よう」とせき立ててきた。

そのとき「何をいまさら…」と思われた宮島さんのお母さんが、「いままでここで苦労ばなめさせられてきたつですけん、いまさら個室に移ることもなかです」とつっぱねられると、「そげんいわんでくれ、太田さんからやかましゅういわれると困ります」と、こんくる。こやつがこやつがと。

息子の奴の気げんのよかとき、「わが子やわがカカばうったくりこそするばってん、お前はまアだは許されてよいもんだろうか。

荒尾市職員　病院というところを、これまで人道上の立場に立ってやっているところだとばかり思ってきたが、こんど見舞いにいって見てはじめて、その病院も支配者・独占資本の側にあるのだということをつくづくさとった。

まったく病院側の姿勢には憤りを感じた。本来ならばだれからもいわれぬ前に、宮島さんという一個の人間の命を、これほどまでに犯した三井が、せめて個室にいれてやってで両親をはげまし、看病をつづけてもらうくらいな気持をもっていてほしかった。

何ごとも程々に という話

K生

〈あれがよいこれがよいと――ようす。

えらんでみるが　　その馬はきっと感じていた

それにつけても　　ことだったでしょう、「自分

ゼニのほしさよ　　の持物がせめてこれくらい大

きかったら、神としてまつられこそすれ、まさかキンタマを抜かれることはなかったろうに――。

ある日K山のふもとにある石造りの、大きな性殖器をまつってある社の前を通りました。丁度そのとき大きな馬がその性殖器の神の前にてあの長いかおを下に向け、瞳に大きなツブの涙を浮かべているのを見ました。

〈夫婦づれのコガネムシがきて、話していることを聞きました。

――ねえおとうさん、貫男の持物がこんなに大きかったら、今こんなに幸福にはくらせなかったでしょう。

やっぱり何事も程々に、その人に相応したくらしをしたく思いますが、でも現今の私たちは、私たちにふさわしい幸福をもっていないようです。この上はできる限り体を大切にして皆が団結し、国に資本に、私たちにふさわしい幸福を要求してゆこうではありませんか。

×

本所指導部第二転場分会転場新聞〃二分会〃から。